

あいだのすみっこ不定期漫遊連載 第112回

世界制覇の夢と離散状況と

「日本およびアジア地域におけるグローバル・アートとディアスポラ・アート」より (後)

稲賀 繁美

(いなが しげみ/国際日本文化研究センター, 総合研究大学院大学)

5. Identity, imprisonment or invention?

ここまで「全球的アジア (複数) におけるアジアのアートを想像する」とでも直訳するほかないパネル, *Imagining Asian Art in Global Asias*のなかで, 筆者が討論者として参加を要請された4本の発表に限り, 自由連想に身を任せていささかの講評を述べてきた。これに先立つ1日目には, まず午前には「グローバルからインターナショナルへ」*From Global to International*と, 世間の常識となる時間軸とは転倒した標語が謳われ, 午後には「アジアのディアスポラ研究と実践の経緯」*Trajectories of Asian Diasporic Scholarship and Practice*が論じられた。各々の発表に逐一及する余裕はない。総括討論での筆者の発言内容の要約を試みる。

偶然, 藤原書店編集部編の『「アジア」を考える』が手元に届いた。一橋大学のイ・ヨンスクさんが北米合衆国ヴァージニア州で2003年に発生した無差別乱射事件に触れている。韓国系米人によるこの事件に対して, 韓国政府は公式の弔問団を派遣して哀悼の意を表しようとした。だがそれはワシントンからの, ご遠慮頂きたい旨の丁寧なる返答により拒絶された。もとより移民国家である北米合衆国にあっては, 同様の事件に直面して, 関与者の出身国籍を問うことは, 社会正義としては不適切。ここに韓国の儒教意識と, 北米移民国の市民権意識

との落差が露呈した。とはいえ, 公式見解と市民感情とは別だろう。ゆくりなくも思い出されたのは, 1979年ハリで発生した, 日本人留学生による現地女学生殺害・人肉食事件である。同時期ハリに滞在した日本人留学生たちは, しばらくは肉屋に出入りすることも憚られる状態だった, と証言する。だが同様の事件が東アジアで発生すればどうだろうか。

人種主義は, 普段は隠されていても, 人種が絡まった猟奇的事件でも突発すれば, 突然, 意識の表面へと浮上する。そして国家ごとの国民意識は, 東アジアでは, きわめて強烈な帰属意識の枠組みを構成する。そこでは「アジア人」としての同胞意識など, おそろしく希薄であり, むしろ心理的な葛藤が前面に出る。だがひとたび北米移民社会に居を移せば, 自分もまた「アジア系アメリカ人」という, それまで意識もしなかった別種の次元のidentityが突然に意識される。とはいえ在日朝鮮人・韓国人の強烈な郷愁や, それを拒絶する母国や日本社会に対する根深い疎外感, 北米コリアンの市民意識とは大きく隔たっている。

Margo MachidaやTomie Araiが表明した日系米国人としての, 北米社会における社会的使命感には, 米国民として認知されるに至った自分たちの矜持が鮮明に刻印されている。またサモア出身のYuki Kiharaは, 日系サモア人としてのminorityの主体性を,

所属社会に向けて発言してゆく方策を、タラノアと呼ばれる踊りの実践に探っている。複数のエスニック集団のあいだの触媒となることに誇りを見いだす、その自信に溢れた行動力には、イギリス連邦、とりわけニュージーランドにおける少数民族政策が如実に反映している。

こうした事例から見えてくるのは、identityとは天与によって決定されるものではないことだ。困難な状況、不利な立場に置かれれば、自分の国籍を恨む場合もある。自己主張を模索するうちに、かえってidentityという牢獄に自らを封じ込める場合すら発生する。だが自己同一性は周囲の枠組みによって伸び縮みし、準拠集団の水準に応じて変更される。Identityとは、そのたゆましいなかで紡ぎ上げ、社会関係の内に編み上げてゆくものだろう。河原温のように、日本人というidentityを社会的に拒絶することでNew York在住の根無し草のアーティストという境遇を入手する、というradicalな選択を生きた例も、忘れてはなるまい。Oscar Hoは、香港人は普通の中国人よりもさらに中国人的なのだ、という逆説を吐いたが、これは境界線を跨ぐ人格が、危機状況において巧まらずして獲得し発揮す

るidentityである。「自分を会員に含むいかなる組織にも、自分は属したくない」と述べたのはグルーチョ・マルクスだったが、この逆説のうちにidentity意識の背理、臨界点も探りうる。そこから、とかく安易に賞賛されるglobalizationの思わぬ死角も、視野に入ってくるのではあるまいか。

6. ジクソー・パズルと欠けたピース

Globalizationとはそもそも何なのか。ひとつの定義としては、度量衡の統一があげられる。Globalization can be defined as unification of measures.それは古代であれば秦の始皇帝の施策であり、ローマ帝国の版図支配にも、版図の内部における度量衡の規格の統一が不可欠の手段だった。現在であれば、英語で学術論文を刊行するためには、英米圏で定められた書式を厳密に遵守し、それに適応することが必要条件として求められる。そこからの逸脱は、研究者としての市民権の剥奪に直結する。多文化主義などと呼ばれるが、ここでの「多様性」とは「許容される異質性」の範囲内でしか保証されず、その対極には「過度な均質性」にたいする忌避がある。これを縦横の座標軸として、論理的にこの対偶

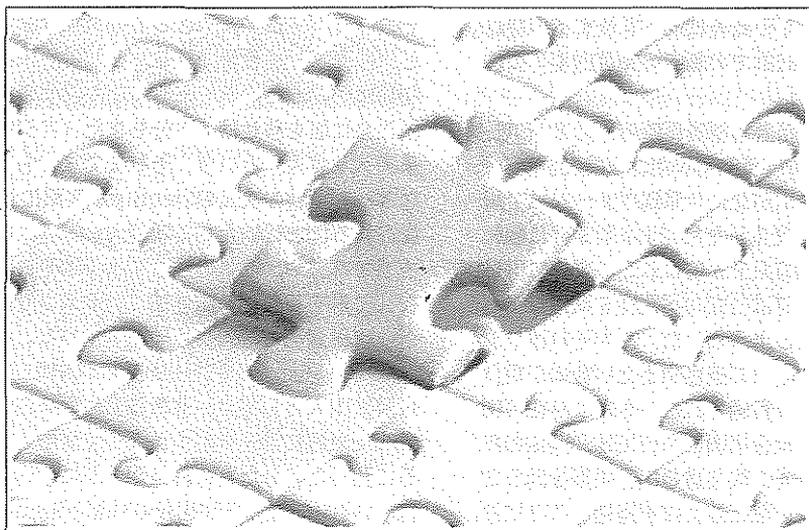


図6 ジクソー・パズル



図7 『1969新宿西口地下広場』（大木晴子・鈴木一誌編著）2014年刊
引用出典：<http://ameblo.jp/nyarome007/theme-10005819956.html>

を取れば、「許容されざる異質性」は排除される反面、同質性にも「耐用限界」のあることがみえてくる。intolerable homogeneity と permissible heterogeneity と。特定の社会秩序のなかでは、これら両極の条件の振幅範囲内で、要請を満たし、その限度を超えない良識が求められる。

ここでジクソー・パズル〔図6〕を考えてみたい。パズルのピースにはふたつと同一の形状のものはない。その限りではゲームは異質性から成り立っている。だがこれらの互いに異質なはずのピースは、唯一可能な構図のうちに完璧に嵌りこむように設計されている。個々のピースは自律しているように見えながら、実際にはそれが取り囲む8つのピースが構成する空隙によって条件づけられている。ピースの形状は、周囲との関係によって相互に決定されており、ピースのあいだに優劣の上限関係は存在しない。こうして構成される平面が、或る絵柄を描く。各々のピースがその全体の絵柄に満足しているなら、それでよかろう。だが仮に全体の構図が歪んでいたり、それが邪悪な意志に服従していたりすれば、どうだろうか。この構図には全体主義とか、覇権主義といったレッテルが貼られるはずだ。

ここにひとつだけ、なぜかうまくピースが嵌らない空隙が残されたとしよう。それを適切な形状のピースで埋めれば、全体の秩序を回復することもできる。だが逆に考えれば、この空隙は、構図全体の歪みを、その欠如によって露呈・代行しているのではないか。全体の構図の歪みが一点に収斂され、そのため、本来この部分を埋めていたはずのピースが弾きだされ、脱落したため、欠落の穴が残された、という推測もなりたつだろう。こうして残された空隙には、雑草が蔓延^{はびこ}り、違法建築が設営され、そこをニッチとして密かに悪のアジトが形成されたりもする。秩序の張り巡らされた領域の死角にふと出現した空白地帯は、法の秩序の及ばない無法地帯、outlawの蟄集する暗黒地帯、暗黒街となる理屈である。

秩序の側からみれば、こうした暗闇は排除されねばならない。秩序を貫徹することによって違法行為を摘発するのが権力の務めである。新宿西口広場の無法地帯〔図7〕が鎮圧され、東口のゴールデン街も浄化され、その傍らに権力の中核としての、丹下健三の東京都庁が佇立する。だがこの闇社会を塗りこめる秩序の貫徹によって、いったい何が排除されたのだろうか。

窒息されたものを「夢」と呼ぶのは、あまりに浪漫主義的で、牧歌的。60年代末に解放区の夢を託すのは、過去賛美、nostalgia志向かもしれない。だがそうした空隙の無秩序空間には、社会の硬直化を緩和するゆとり、マージンが確保されていたのではなかったか。マージンとは定義からして少数派でしかありえない。だがそれは車輪の軸受けの「遊び」でもあって、それなくしては車輪も回転しなくなってしまう。

最近のシステム工学の知見によれば、雑音とみなされる不純物が適度に混合されることは、機構の能率よい運転の向上につながるのだという。これ自体、きわめつきに管理者的な発想ではあるが、昆虫学者の言うハタラクシアの逆説も有名だろう。どの群れにも一定数は怠け者のアリがいる。働きものだけを抽出して新たな群れを造らしてみても、どうしたわけか、そこでも同率の怠け者たちが増えてしまう。どうやら群れはその維持繁栄のために怠け者を必要としているようだ。では、そうした「厄介者」「怠け者」とは何なのか。その活動の場はいずれこ?

この問いは、しばしば能天気には肯定され

るfree spaceなる標語に、きちんとした理論的足場を提供しようとする試みだ。open spaceは無条件には成立しない。1960年代に北米に滞在した東野芳明は、当時のinternational art sceneを揶揄して、それをurban republicと呼んだ。Globalizationは、いわばその隔世遺伝ではあるまいか。だが、それは都市生活者だけの「共和国」ではない。国境なき都市生活を営む特権的な移民たちの生活空間には、実際にはあちこちに規制や法律の網目から零れ落ちた穴場が隠されており、そこにruralな後背地から、思わぬ雑草や外来種が到来する。このような雑草の繁茂を許す、ジグソー・パズルの(為政者側によれば)厄介な空隙こそが、free spaceの成立要件であり、なおかつその厳密な定義なのではなからうか。

行政のお墨付きでつくられた「お祭り広場」が機能しなかったことは、1970年の大阪万国博覧会の「お祭り広場」[図8]の失敗で実証済みだったはずだ。いまや日本国民の高年齢層しか体験記憶をもたない事例だが、思えば、大阪万国博覧会そのものが典型的に映し出していたものこそ、日本社会から「遊び」の空間が排除され、封殺さ



図8 1970年、大阪万国博覧会、お祭り広場と太陽の塔
引用出典<http://fukafuka51.exblog.jp/5233568/>

れる時代相ではなかったか。同様の管理者的発想が、2011年3月11日の東日本大震災以降数年を経た現在、21世紀の10年代の日本にあって、著しい昂進を遂げつつある。

7. Yellow Umbrella

2014年、香港では普通選挙の実施を訴えて、いくつかの解放区が成立した。そこには民衆による自主的なアートが開花した。Osacar Hoから感動的な現場報告があったが、ここで「我要真普選」の政治的な達成や、抑圧的な権力への対抗を、牧歌的に寿ごうというのではない。象徴となった黄色の雨傘に注目したい。黄色の選択には、あるいは東北の震災を慰問した日本の皇后が持参した黄色の花と同じ選択が働いた可能性もある。それは台湾での立法院占拠から香港へと、国境を超えて伝播した。さらに雨傘のマスコットとして、宮崎駿一スタジオ・ジブリのトトロが、香港の解放区、街頭いたるところで雨傘を手に登場した。

【図9】著作権や複製権に拘るならば、これは由々しき海賊版の跳梁跋扈だろう。またそこに日本のソフト・パワーの侮りがたい威力を見て、これを「文化侵略」として政治的に封殺する（中国側）のも、反対にこれに無邪気な喝采を送る（日本側）のも、どちらも国権的な偏向だろう。

トトロが森の精spirit of the forestであることは、スペインのようなカトリック国の観衆でも、素直に実感する。森に庇護されてある生存への生態学的な自己同一化、あるいは本能的な接近が、大量の黄色の雨傘となって、雨後の筍のように繁茂した。だが雨傘が象徴となりえたのには、東南アジアの亜熱帯・多雨地域という気候条件も無視できまい。さらに皮肉にも、人々が傘をもちよって連帯するためには、雨もまた不可欠だった——たとえ招かれざる豪雨が抑圧的、強圧的な政治権力の行使の謂に他ならなかったにせよ。free spaceとは無菌室ではない。必ずしもその安全が保障されていないからこそ、実験の培養器となる。思わぬ雑菌の混入による実験の失敗から、時

に新たなserendipity、つまり思わぬ発見も生まれる。降雨は災厄でもあれば、僥倖ともなりうる。その薬物=毒pharmakonの両義性を見失ってはなるまい。

人々を繋ぎとめた雨傘は、やがて破損し、残骸の廃棄物となって消えてゆく。それは永遠の記念碑ではなく、一時の政治的な気象への反応でしかなく、束の間の堆積として喪失への運命を辿る。だがそこに人々の意志が集約され、雨傘の連なりとして紡がれた事実は消滅するまい。思い出されたのは玄侑宗久の出世作『中陰の花』だった。使い古しの紙縫りを束ね合わせる無為の行為が、人々の魂を繋ぎ留め、束の間だが死者との交通を保障する。それと同じ営みが、政治的な危機に瀕して、黄色の雨傘となって開花した【図10】。黄色の花が群生繁茂した土壌は、政治権力の空白地帯、隙間であり、詩人リルケのいう「間の国」Zwischenlandではなかったか。ジクソー・パズルという支配形態にばかりと開いた空隙が、雨傘の織物の析出を許したのである。You may say I am a dreamer, Yes, but I am not the



図9 我要真普選 香港Yellow Umbrella に登場したトトロ 香港, 2014
出典: <https://twitter.com/ravicin/status/527138765731397634>

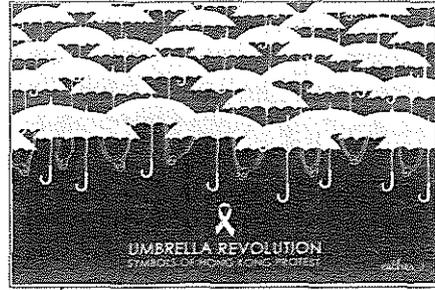


図10 黄傘運動のロゴマーク(案) 香港, 2014
 出典: <https://stocklogos.com/topic/logos-hong-kong-umbrella-movement-logo-competition>

only one.このOscar Hoのメッセージは「雑草の夢」たちの連帯を謳った見事な詩句だろう。南北朝鮮の休戦ラインの両側に広がる無人地帯にアートの解放区の実現を夢見るKim Sunjungの企画も、秘密の地下通路によって、香港のFree spaceと密かに繋がっているはずである。そしてそこには、もはや西欧global artの擬態mimicryからは脱した一歩が刻まれていたはずだ。

8. 擬態mimicryとは何なのか

擬態mimicryとはHomi Bhabhaが流行らせた言葉だった。元来はインドを範例としたpost-colonial理論を出所とする。被植民地上層階級が植民者の文化を模倣する態度を、バーバは「擬態」と呼んだ。時に過剰なまでに見事な擬態が演じられもするが、その行き過ぎが、かえって本国からは足元を見られる結果を招きもする。だが「擬態」とは元来は生物学の用語だった。ランの一種が、ある種のハチの雌にそっくりな形状の花を付け、雄蜂を雄蕊に引き寄せることで、受粉を助けてもらう例 [図11] など、今日では小学生でも知っていよう。天敵を装って威嚇する蜻や、別種の雛に擬態して親鳥を騙し、巣を横領する鳥もある。

だがここで問題にしたいのは、近年における擬態の倒錯である。バーバが理論化した段階では、擬態にこれ努めるのは、被植

民地側の上層階級という少数派minorityであり、意識のうえでそれは、旧植民地側という体制派あるいは多数派majorityへの見かけのうえでの同一化identificationを目的とする変身願望の謂だったはずだ。ところがpost-colonialと呼ばれる状況のもと、すくなくともかつての植民地帝国の首都で進行しているのは、ここからさらに一周逆転した社会現象ではなかろうか。旧植民地出身の若きエリートたちがいまや知的選良の地位を占めており、かれらminority自身が、旧宗主国のmajorityにとって、倫理的あるいは道徳的に「模倣」すべき、行動模範behavior modelを提供するに至っている。

一例にすぎまいが、Nelson Mandela [図12] の逝去が伝えられた折、欧米の高級紙と呼ばれる新聞での扱いを思い出した。たまたま欧州旅行中に空港で拾ったTageszeitung 2013年12月7-8日の週末版が手元にあるが、通常の紙面一面ぶち抜きの記事に続いて、文化欄別冊はDanke, Mandibaという見出しのもとに、数ページの大特集を組んでいた。ところが日本に戻ってみると、まるで過去の人という扱いで、写真もない数行の死亡記事が目立たぬ場所にあるだけだった。日本の大新聞の冷淡さ、欧米との落差に驚く一方で、マンデラに人種差別撤廃の文化英雄を見出し、賞賛の記事を綴るのが健全なる国際感覚であり、あ

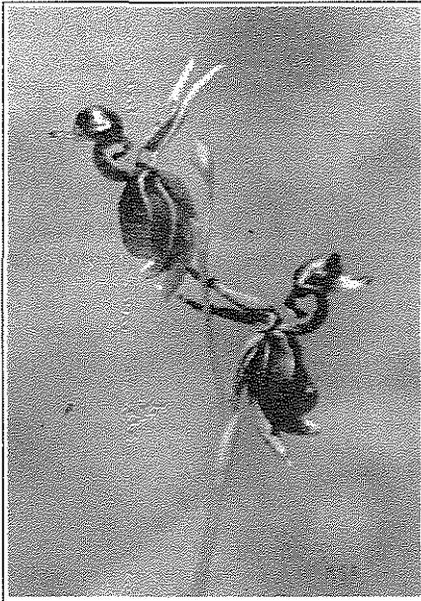


図11 フライング・ダック・オーキッド (Flying Duck Orchid) ハチに擬態する蘭の花弁

るべき市民意識である、とするドイツをはじめとしたマスコミの「社会的良識」にも圧倒された。

被抑圧民族、少数者の擁護とその人権を尊重する良識は、思想史的な流れでいえば、『オリエンタリズム』の著者、エドワード・W・サイードの知識人論や、パレスティナ人としてのニューヨークでの政治的実践をひとつの代表として、80年代以降に市民意

識として成長を遂げたものとみてよいだろうか。その結果として、いまや少数派こそが、多数派がそこに模範を見出すべき規範に成り代わる、という転倒が発生している。それを倒錯した事態と捉えるのは、思想的には「政治的に正しくない」価値判断として指弾されよう。だがそれはバーバの理論に忠実である限り、文化的な「擬態」の結果発生した「変態」現象だったことも否定できない。「変態」とは日本語では生物学で言うmetamorphosisであるとともに、またabnormalityさらにはperversityすなわち「倒錯」をも意味する語彙であった。

Globalizeされた社会における藝術家artistsとはいかなる存在なのか。規律や禁令によって錯綜した包囲状態が構成され、窒息寸前の社会にあつて、法体系の綻び目を見定め、法の空白地帯を狙い撃ちして、そこにあらたな生存の可能性を見つけるのは、優れて藝術家に要請される職能のひとつだろう。それは社会の危機を指さしつつも、自らがその危機を体現することも厭わない、定義からしてminorityの生態である。ジクソー・パズルの欠けたピースに、かりそめとはいえ自らの居場所を定め、社会の矛盾の結節点を演じ、それを指弾しつつも、自らが韌帯となって逆説的にも社会の崩壊を食い止め、束の間の緩和と憩いとを提案し、提供することに、藝術の効能のひとつ

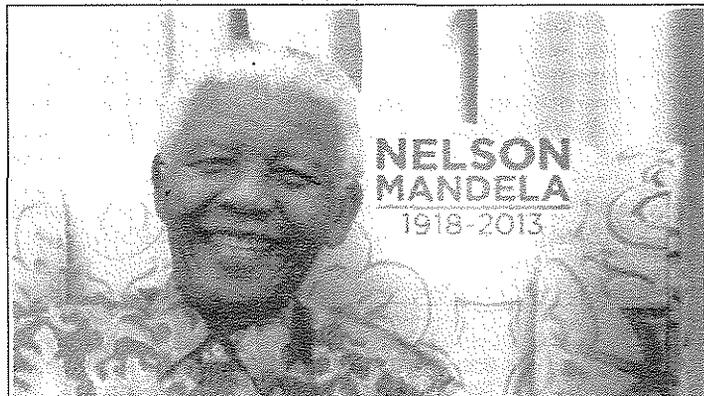


図12. ネルソン・マンデラ 国家反逆罪から大統領へ

出典：<http://hemitotsy.blog.fc2.com/blog-entry-237.html?sp>

を認めることは、暴論ではないだろう。

嶋田美子が標榜するとおり、今日の汎=藝術家global artistは、同時に「叛=藝術家」たるidentityをなにがしか帯びている宿命にあるのではないか。それは評者の定義に従えば、優れて海賊的な存在たることを避けえない存在である——それが生体系全体の遷移と循環とに必要不可欠な不純物である限りにおいて。だから藝術家は、たとえメジャーmajorな「名声」を獲得したとしても、その存在様態において、徹頭徹尾マイナーminorな存在でなければならない。

あるいは、majorityがminorityと位相転換を果たす、その交錯点、両者の「あいだ」ma-espace-tempsを占める運動を、art of livingとして改めて定義し直すべきではないか。

The Art of Livingとはhumorの大家「幽默大師」の異名を取り、1930年代からの危機の時代に、英語圏と中国語圏との狭間で活躍した作家、林語堂の提唱した合言葉であった。Globalとdiasporaとが反転する特異点。その生態livesに触れる技術=芸nersが、いま模索されている。

編集雑記

前号(222号)の訂正とお詫び

▲本号21ページをご覧ください。

訃報

南島宏(みしま ひろし)氏

美術評論家、女子美術大学教授。1月10日逝去、58歳。美術館畑を歩き、2002年開館の熊本市現代美術館では故・田中幸人氏とともにその創設準備にかかわった。04年から08年まで、田中氏の後をうけて同館館長。2009年、第53回ヴェネツィア・ビエンナーレ日本館コミッションナーをつとめられました(選出作家:やなぎみわ)。

桜井孝身(さくらい たかみ)氏

▲画家。2016年2月15日、居住地の福岡市で逝去。88歳。周知のように、〈九州派〉の頭目的な存在でした。

▲森崎茂という方の『日々愚案』というブログにいち早く載った長めの追悼記「歩く浄土74:内包親族論16-桜井孝身の死」が興味深い。

▲〈記憶では1987年。仕事の昼休みに桜井さんの絵を見ようと展覧会に行った。

もちろん初対面。絵を見た瞬間、ああ、いいなと思った。宮沢賢治の「風の又三郎」の挿絵なんかいいなと思ったらその本がもう実際にあった。たくさんの観覧者がいたが素人の感想を申し述べた。一人去り、二人去り、気がついたら桜井さんとわたしの二人になっていた。激しい口調でわたしがなにかを話したからだと思う。にこにこしながら桜井さんはわたしの話を聞いていた。お前は吉本隆明かもしれないがおれは谷川雁が好きやった、と桜井さんは言った。そのことに文句を言ったように思う。やりとり尋常でない雰囲気があった。このときのことを桜井さんは福岡市美術館で開催されたロングランの九州派回顧展で書いている。桜井さんにとってたしかに見ず知らずのヘンなおっさんだったわけだ)。

▲引用文中の「九州派回顧展」とは、福岡市美術館が同グループにはじめてとりくんだ1988年のものを指すはずだ。

▲そういえば、うかつにもいまままで知るところではなかったが、〈九州派〉立ち上げ以来の桜井氏の盟友、オチオサム(本名:越智晴)氏も、昨年4月、ひと足早く亡くなられていたんですねえ。79歳。

釜山映画祭に拍手!

▲「Diving Bell」。「潜水鍾」。まあ、そういう兵器もどきのものがあるらしい。

あの韓国のフェリー転覆事故のさい、救助にこれの投入が試みられたといえます。実現されたかどうかは詳らかにしません。ともかく、その経過を軸に、セウォル号事故の問題点を洗い出すドキュメンタリー映画がつけられました。タイトルはすべり『Diving Bell』(韓国、2014)。

▲この作品が昨年の釜山国際映画祭に招待されると、上映の是非をめぐって物議をかもしました。遺族会が、「これは民間会社の製品実験にすぎない」のに、映画「犠牲者感情を傷つける」と国会で問題視。朴槿恵大統領側近と目される釜山市市長も、上映中止要請。市長はじつは、この映画祭の組織委員長なのです。

▲だが、映画祭執行部はこれをはねのけて上映を取行。もっとも実行委員長のイ・ヨンガンは、今年の1月、辞職を勧告されるが、韓国映画界の後押しを背にこれにもしたがわなかったという。

▲<私は大学教授として30年間、学生を教えた。もし自分が独立性を守れなければ、学生に言う言葉がない。イはきっぱりと言い切った><〈伝える訴える〉、東京新聞20160128,立花珠樹)。

▲ちなみに、韓国の映画の検閲法は金大中大統領時代に撤廃されている。つけ加えておけば、釜山市市長は2月18日、組織委員長辞任を表明したといえます。

[F/20140225]

月刊『あいだ』223号

編集=福住治夫 誌面設計=滝葉さり 印刷=石橋大 制作管理=新倉美佳 藤江民 製本=このあいだ社中 誌面設計 客員=鳥山晋

発行=『あいだ』の会

〒179-0072 東京都練馬区光が丘2-7-4-1008 Tel/Fax 03-3976-7203
http://gekkan-aida.rgr.jp/ mail address : info@gekkan-aida.rgr.jp